

★ ☆
星の文藝欄
★ ☆

近江舞子へ

京都 宇野 良雄

ボイと汽笛が鳴つてスクリウの廻轉が弱まると、前部上甲板から快よいバンドが夏の天空に響く。白亜の瀟洒な船體は正午近い日光を反射して、キラキラ光る湖面に拋物線を描いて静かに棧橋に近づく。

麗湖(Lake)琵琶の西畔こゝ雄松崎は白砂青松の岬が湖岸から環狀に連なり、内湖と外湖を劃し恰も天橋の如く、その一端に立ち對岸沖の島を淡路島とみれば、播州舞子の濱に彷彿たるものあり。近江舞子の名によつて呼ばれ、後に比良の連峰を背ひ、北に遙か伊吹の英峰を望む。氣は澄み水清く風光明媚、夏は水泳客とキャンパいで賑ひ、大津からデゼルエンデンの優秀船が二時間の船路で京阪からの人を運ぶ。

ハツチから棧橋へ、そして砂濱へ、紺のダブルに白ズボン、ワンピース、半パンツに大リュック、灼熱の夏をエンヂョイする潑刺たる若人の羅列だ。四日間身を託すべきテントとエネルギー補給の食料品にふくらむ大リュックと巨大な望遠鏡箱を持つた T と T' と U とが続く。濱の裸體群が機械の大きい箱に目をつけ、何だ何だと私語やく。これは天體望遠鏡、吾等は花山天文臺より出張の觀測隊で御座い。とはまさかロソープ島の日食觀測隊でもあるまいし。テントが張られ、十輦反射機が組立てられるともう河童は湖に飛込む。クロールだ。バタフライだ。水泳場の方では寫眞の競技大會だ。あちらの濱では綱引きだ。頭上近い太陽は強烈な光線を惜みなく降り注ぐ。積亂雲が大きな石鹼の泡沫の様に眞白に輝やいて、青い色にもくもくと盛上る。

砂に堀つた竈に飯盒のめしがふく頃には、炎熱の太陽は名残りを西空の茜色に残して沈み、涼冷の夜が訪ずれる。アルクトウルス、ベガ、アルタイル、デネブ、ぼつぼつスタ1達の御着席だ。八日の月が南天に掛り、松林が黒い影を投げる。愈々望遠鏡の御出動。濱のキャンパ1が集まつて公開天文臺

の現出だ。『これを覗くと明日の天気が解りますか』此奴望遠鏡で雨の降る穴でも探してゐると思つてゐるのか。『これで口径十糎位ですか』までは良かったが『これ位だとどれ程の距離まで届きますか』と來るとまさか大砲と間違へてゐるのではなからうなと顔を見直ほさねばならない。月のニキビ、木星の月、土星の鉢巻、それにアルビレオの二色のコントラスト。T' が盛んに反射望遠鏡の説明と初等天文講話をやつてゐる。

月も西の山に沈み、キャンプファイヤも消へてしまつた。何處かのテントから漏れてゐたポ１タブルのセレナーデも何時しか止んで、渚で小波が靜かな音樂を繰返へしてゐる。全天暗黒、銀河も星も素顔を見せる。觀測開始。T が首を不自然に傾けて『ノバが明るい明るい』と云ふ。U は北を向いてペルセの花火見物。牡牛が登るオリオンがのぞく。黎明の左手!! 舌狀の怪光が伸びる。今シーズン初めて見る東天黄道光だ。寶石を散ばめたド１ムは刻刻音もなく廻る。地球が自分の身體を載せて、東へ東へ廻るのが身體に感じられる。

楽しみにしてゐたアンタレスと月の接吻は雪のカ１テンが掛けられ、月がカ１テンの向ふから『十八年間お待ちなさい』と笑つてゐた。(昭和拾年八月)

„DOME”

(稻垣武五)

ド１ムは窓のある木茸。

そこで

向日葵に似た赤道儀は

戀人を正確に尾行するのに微音をたてる。

透明な立闇を眞直に來るお客達は

倒になつてとても大きくなる。

壁の時計は恥をかゝないが

不自由なことに香水と色紙がない。